サンロータス研究所版法華経の発刊を祝して

土の餅と白鳥

田渕隆三

サンロータス研究所版法華経の発刊を祝して

土の餅と白鳥

画家・彫刻家　田渕隆三

世界の文化の旅を続けている。

心に残る二つのインドがあった。

一つは、広大なるインドを初めて統一した阿育大王のマウリア王朝である。

アレクサンドロス大王は、持てる財を全て処分して、自らは「希望」の二字だけをもって、紀元前三三四年、ギリシアの大地から、固い結び目を切って、東西融合の夢を持って東方遠征に出立した。

エジプト、ペルシアを転戦して、征服地各所に、七十箇所ともいわれるアレクサンドリアを建設し、紀元前三二六年、インダスの支流を渡りインドにやって来た。

立ちはだかる軍勢を撃破し、インド中央部へ迫る勢いであったが、部下の反対に遭い、帰還を余儀なくされた。

帰るに際し、インダス支流の一つの河畔に祭壇を十二基造って祈りを捧げた。その様子を、ひそかにじっと見ていた人がいる。

後にマウリア王朝の創始者となるチャンドラグプタであった。

阿育の祖父である。阿育もまた、おそらく祖父にしたがってこの祭壇を見ていたに違いない。

祭壇が、どのようなものであったかは伝えられていないが、アレクサンドロスは遠征に彫刻家を同行させていたというから、祭壇には、神々の像が設置されていたと思われる。

神を見えるものとして、人間の姿で表現したのが古代ギリシア彫刻であった。

この祭壇は、記録によると、以後、少なくとも七百年間ほどインドにあったといわれる。

当時、釈尊の像は、造られなかった。釈尊を連想させる法輪や菩提樹、そして足の形（仏足石）で表現され、固く仏を刻むことは禁止されていた。

インドの統一を目指した阿育は、戦いで殺戮を繰り返すが、そのたびに見る凄惨な戦場の様子に、深く心に期すものがあった。

仏教に深く帰依して非暴力に転じ、法（ダルマ）をもって統治する、これが、現存するマウリア朝の文治主義である。

阿育の法勅を刻み、獅子、象、牛、馬といった四聖獣のいずれかの像を載せた石柱が全土に立てられて、この阿育の王柱の見えるところは、阿育の統治が民衆に行き渡るとした。

善政は、政治や経済のほか、すべてに及び、人間のみでなく動物のための病院までが造られた。

釈尊初転法輪の地、サールナートの四面に向いた四頭の獅子の載る王柱は、獅子の下の円盤には四面に四聖獣、中央には法輪が施されている。

磨き上げられた硬い石の獅子像は、まことに圧倒されるものがある。

二千二百年余りの時を越えてそこにある厳然とした獅子は、仏法とは、生命の法といわれるが、無常な森羅万象のなかに、常住の法があることを語っている。

すべてがこの法の内で存在している。

この法則から外れるいのちはない。

そのなかで、美という花をつけたところが、永遠に繁栄する。

マウリア朝のかつての花の都、パトナの博物館に、当時の彫刻『惑星の女神像』（払子を持つヤクシー像）がある。

肉感的で健康的で、真に動き出しそうである。

そして、阿育が建立し、次の王朝によって整えられたサンチーの大塔には、ドーム形のストゥーパを中心に四つの塔門に数千の彫刻群が刻まれている。

釈尊の生涯や阿育大王と妃の姿まで刻まれて、圧巻である。

長い間、地中に埋もれていたが、十九世紀にイギリス人の手によって発掘され、その後、復元されたという。

『獅子柱頭』水彩　F3　2007 年

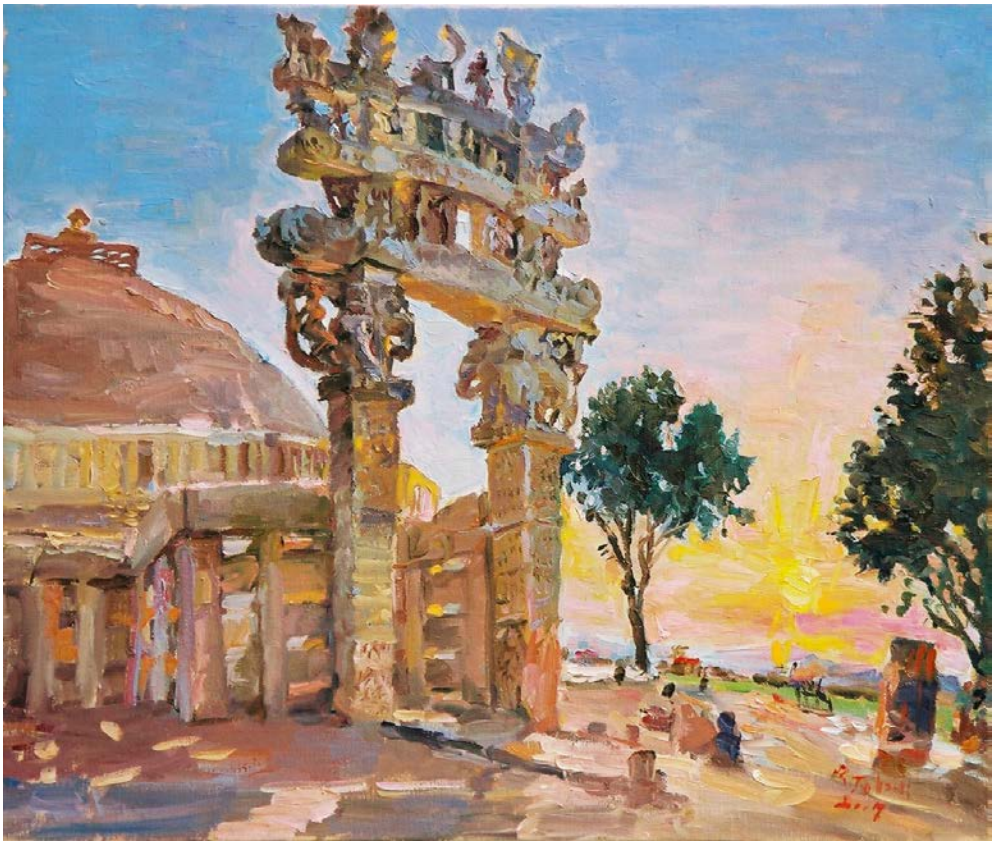
マウリア王朝を訪れたセレウコス朝ペルシアの使節メガステーネスは「マウリア朝では、彫刻家が大事にされ、仮に、彫刻家の手や目を傷つけた者は、死罪と決められている」と、本国に報告している。

これは、重大な記録である。

これほどまでに、物言わぬ文化・芸術の社会のなかでの存在が重んじられた歴史はない。

思いもよらぬ平和のための芸術である。

阿育には、前世の物語がある。



『サンチータ景』油彩　F10　2007年

釈尊在世に、徳勝、無勝という二人の童子がいた。

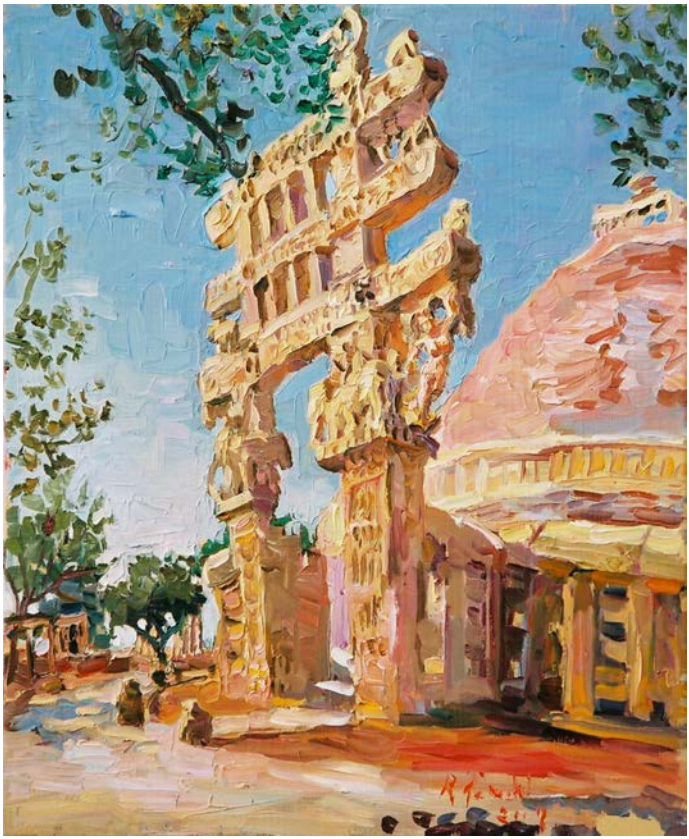
釈尊に出会ったとき、二人は土の餅を供養した。

高貴なる方であると本能的に感じて、お金も地位も格式もない、何も持ち合わせないことから、まさに無償の真心をもって供養した。

これが、土の餅であった。

土の餅に応えて釈尊は、「私の滅後、百年後に、一人は大王となり、もう一人は妃となる」と、明言される。

一つの哲学が形を結ぶようになるのには、少なくとも百年を要する。



『サンチーの朝・東門』油彩　F８　2007年

土の餅とは、芸術を象徴するものといえる。

芸術は、食べることもできない土や石や紙といった、取るに足らないものに芸術家が無償の真心を込めることで、人類の宝に変える。

「此の画木に魂魄と申す神（たましい）を入るる事は法華経の力なり」

（日蓮「四条金吾釈迦仏供養事」）

真心を込めるとは、宇宙と社会の根源の法に生きることである。

まさに一つの奇跡がここに起こっている。

人間の思いは、生きた芸術を誕生させるという不可能を

『サンチー東門のヤクシー』水彩　14.0 × 9.5cm　2007 年

可能にした。

石が踊り、石が歌う。

すべては「ア」から始まる。

生命誕生の歓喜の声である。

アレクサンドロスと阿育、東西が融合する世界の証明があった。

ここに平和の楽土が出現した。

土の餅に意味を見出すことは、植物の世界に目を向ける行為にも通じる。

もの言わぬ植物との接触は、心を豊かにしてくれる。

生命の次元に引き戻してくれる。

地球上に生命誕生以来約四十億年、ほどなく植物は、無償の行為を繰り返して、今にある。
何の見返りも求めず、慈愛のかぎりをつくして、生々世々、植物にはじまり植物に終わる。
何もしゃべらないが、そこには厳然たる法則がある。
生きているときも、死の後も、一つの同じ法則のもとにある。
法華経の哲理に、本因、本果、本国土の三妙合論がある。
仏になる本因、本果があっても、それがいずこの地でなされたものかが明かされていなければ、昔むかし、あるところでの話で終わってしまう。
国土の成仏、草木成仏が、根幹である。
本国土、草木の成仏が明かされて、まさに実像を結ぶものとなる。
娑婆世界こそ、本国土である。娑婆即寂光の都であった。
妙法の下では、森羅万象すべてが寂光の都である。
いずれの地も、いずれの人も、尊極の存在である。

さらに一つの流れが現れ、世界に広がった。
ガンダーラである。
世界の博物館に、ひっそりと、しかも厳然たる存在感をもって光るガンダーラ美術の彫刻たち。

これが生まれたのは、インドの西北、ガンダーラ地方といわれた今のパキスタン北部とアフガニスタンの一部地域で、紀元一、二世紀のクシャーン朝の迦弐志加王の治世であった。

ガンダーラ美術の特徴は、ここで、それまで禁じられていた仏像が造られたことにある。釈尊の本性譚や伝記が語られ、彫刻となった。

四度目とされる仏典結集（第四結集）がなされたのも、仏像誕生後の迦弐志加王治世のこの地方で、諸説あるが、これに前後して、今日に伝わる梵本の法華経が成立した。

第四結集の内容は不明であるが、旧来の体制側である上座部（小乗）によるものであり、法華経の編纂は、それに対して菩薩の修行を重んじる反体制側の大乗教団によって行なわれた。

第四結集と法華経の編纂は、どちらが先かは議論が分かれるようであるが、いずれにしても、法華経の編纂は、台頭する商工業者ら新興の民衆勢力の意識変革が背景にあったと思われる。

法華経では、如実知見として、人々万人の生命のなかに、仏性を見抜いている。

初めて民衆の生命のなかに、一念三千として、仏を見たのである。

この法華経を成立させた精神基盤が当時の人々のなかにあって、それが法華経を編纂させたと推察される。

仏像の誕生も、ギリシア、ローマの神像彫刻の影響は勿論であるが、このような法華経的な精神基盤が育っていたことを前提に、民衆の姿を借りて、仏像が造られることが良しとされたのだと考えられる。

『クシャーン朝のヤクシー三体像と供養者像』水彩　各 14.0 × 9.5cm　2007 年

これが、仏像の誕生である。

足跡でも架空でもない。仏が見えるものとなった。

眼の前の一人に、万人のなかに、仏を見る時代の先がけであった。

これらの彫刻とともに、仏教というインドの哲学は、カラコルムを越え、中央アジアを経て、中国、韓半島諸国、そして日本にまで電流の如く伝播していった。

ガンダーラの美術の存在は、大きい。

「キリストの復活は、ここにあった」「石が生きている」

あるガンダーラ美術展に同席した婦人の声であった。

馬鳴菩薩の逸話が残っている。
ある国のこと、その国王は、白馬のいななきを聞いて、色を増し力を得ていた。
その馬は、白鳥を見ていななく。
その白鳥が、どうしたことか、現れなくなった。
白馬はいななかなくなり、王は力を失った。
主権在民の時代では、民衆こそ王である。
白鳥は、美の化身であり、美しさの象徴である。
白鳥がいなくなった時代は、美がわからなくなった時代である。
何が美しいか、わからなくなった。
民衆は、力を失ってしまった。

美とは、いのちである。
いのちは、宇宙大である。
誰もが全宇宙を持っている。
誰もが永遠のいのち、仏性を持っている。
法華経こそ、生命の謎を解き、生命の全貌を表した経典である。
誰もがなし得なかった、白鳥を呼び戻す術、それこそ法華経であった。

『富士川より』油彩　P20　2017 年

馬鳴菩薩が語る輝かしい文化の歴史があった。

このところ富士に魅了されて、富士を描いている。

富士の麓、富士川の流れるところに岩本山実相寺がある。

鎌倉時代当時、釈尊の一切経が結集されていた。

これを閲覧して、日蓮大聖人は立正安国論を起草された。

正を立てることによって、国の繁栄と平和がある。

こんな不思議なことが、秀嶺富士の麓にあった。

裾野を無窮の大地に広げた勝利山富士である。

『金色の富岳』油彩　P20　2018 年

「月は西より出でて東を照し日は東より出でて西を照す仏法も又以て是くの如し」（日蓮「顕仏未来記」）と、ある。

仏教のルネサンスは、あまたの先人、諸団体や諸先輩の労苦の上に、池田大作先生のリーダーシップによるＳＧＩの出現により、ついにインドにまで還流した。

父母を失った、今は懐かしい、美作の天地。

何の孝養も果たせないままで終わるのか。

間もなく、私自身のいのちもなくなる。

何のために生きてきたのか。

十五歳で母を亡くし、生命の謎が解けぬままで、幸運にも二十三歳で妙法と出合い、最高の芸術目指して、現在がある。

またとない今生のときに、今生の役割を果たしたい。
出会いほど尊く偉大なものはない。
それは、生命を革新してくれる。
宇宙と社会の根源の法を体得して、本物の芸術の花を、世界に発信するときが来た。

二〇一八年三月二十二日　　R・Tabuchi

表紙
『惑星の女神』水彩　F3　2007 年

サンロータス研究所版法華経

妙法蓮華経 開結 付録

二〇一八年五月三日